

何のために遣わされるのか

(「テサロニケ三・一〜五」)

同じ漢字の熟語でも読みによつて全く違った意味を持つものがある。「さいちゆう」と「もなか」(共に最中)、「しきし」と「いろがみ」(共に色紙)、「もつか」と「めした」(共に目下)などがそうだが、「名代」もまたその一例。東京のおじさんのソウルフード、「富士そば」の前におかれた場合は「なだい」(名が世によく知られていること)、「今日は部長の名代(代理の意)で参上しました」という文例だと「みようだい」と読む。どの言語もそうだが、日本語もなかなか難しい。

一、強め励まして信仰を育てるため
パウロがテモテをテサロニケに遣わした積極的な理由は彼らを強め、励ますためであった。しかしこれは「がんばれ、がんばれ」というだけの空疎な精神論的な鼓舞でも、テサロニケのクリスチャンをえこひいき的に猫可愛がりした結果でもない。むしろある聖書学者の翻訳、「あなたがたの信仰のゆえにあなた方をかたく立たせ、励ますために、テモテを遣わした」を見れば解るように、パウロがテモテを派遣したのは与えられた信仰を強化するためであった。キリスト信仰は一時的なものではなく、一連のプロセスであることは主ご自身の種まきのたとえやぶどうの木と枝のたとえ、更には「栄光から栄光へと」という言葉にみられるパウロ自身の表現からも明らかだ。だから現時点においてテサロニケの教会が如何に他の信徒の模範となっていたとて、そのままにしておいてよいとパウロは考えなかったのだ。実際彼らは種々の迫害や先にのべたような自らの腹のためにことを行ふ悪い教師たちに直面していた。だからこそパウロはテモテを遣わして教化を行い、彼らの信仰をより堅固なものとしたのである。伝道者の派遣の主たる目的は信仰の成長のためである。

二、混乱する者が無いようにするため
若き伝道者テモテをこれた若いテサロニケ教会に派遣した目的は積極面と消極面が対になっており、三節には消極面が書かれている。「このような苦難の中にあつても、動揺する者が一人もないようにするためでした」とあるが、前出の翻訳では新改訳で「動揺」と訳された語に「混乱」という訳語が当てられている。神に対して熱心なことは悪いことではない。しかしもしそれが真の知識によるものでなければ、そこにあるのは混乱だ(参・ローマ一〇・二)。これは実に回心前のパウロの現実でもあった。彼は神に対して熱心であった。しかしその結果はどうだろう。彼は彼が信じる神の一人子、神のもとから遣わされた救い主イエスの迫害者になつてしまつていたのだ。実に皮肉な出来事である。そう考えるとなおのこと信仰は育てられねばならない。そして信仰共同体が成長していくとき、その共同体には愛が満ち、混乱や動揺は締め出されていく。FBでも大活躍の菅原巨牧師は先週の木曜「成熟した人、キリストの身丈にまで到達しようとしている人が増えれば争いも無くなるか、或いは極端にすくなくなるだろう。、問題を成長させないことです」と書かれていたがまったくもつてその通りである。正しい教えによつて信仰を強化し、励ましていく

ときに教会内の混乱は自然に終息し、迫害の中にあつてもより強く歩んでいけるのである。

* * *

ケープタウン会議からもう七年もたつてしまつたが、あれは間違いなく私の人生のターニングポイントだった。その中で中国の、所謂「家の教会」の代表者たちが出発直前に拉致され、会議に出席できなかったことが伝えられた。全世界から集まつた四千名を超える教会のリーダーたちが心を合わせ、家の教会の兄弟姉妹のために祈つたのだが、先週偶然にもその時拘留された王怡牧師の証言を見つけた。「私は豚かゴミのように税関から階段や廊下を二百メートルも引きずられ、荷物のように持ちあげられ、警察の車に投げ込まれた。」という記述に戦慄した。だがこのような迫害の中でも「家の教会」の成長は止まらない。手を焼いた当局は三年前、温州に建てられた二千人収容の公認教会の礼拝堂を徹底的に破壊した。王牧師はすかさず「見える教会は壊されましたが、見えない教会を立て上げましょう」と声明を出し信徒を励ましたという。友よ、中国教会の驚異の教会成長のかぎはその信仰の堅固さにある。私たちがそれにならぬ、信仰を立て上げようではないか。